

緋弾のアリア スパロボ
風 短編集

茨の男

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

時にはスパロボとか、ナムカプみたいなのが見たかった。

リハビリを兼ねた試作品です。荒削りな部分がありますが、ご了承下さい。

確定参戦作品

・ルパン三世 GREEN vs RED

・HELLSING

他

目次

汝「ルパン」なりや？ 改訂&増訂版

1

鉄の棺の蓋が開く

10

汝「ルパン」なりや？ 改訂&増訂版

くあらずじく

伝説の探偵シャーロックとの邂逅、そして別れから数週間後、日本各地で大量の怪盗アルセーヌ・ルパンーではなくその孫、ルパン三世なる人物が軽重問わず犯罪を繰り返す事件が発生した。

あまりの人数から駆り出される武偵の遠山キンジ達。
破られた沈黙の十年間。

父親は死んだものだと思っていたルパン四世ー彼女、峰理子は困惑する。何せ、ルパン三世と峰不二子の死の際を自分の眼に焼き付けている。偽物が本物を宣うことはあれど、蘇る筈がないのだ。

一体何処の誰が、何が為に、何故今更になつて？ 真実を求めて焦る理子をキンジとアリア達は抑えながら彼らは様々なルパンと出会い、別れていく。

無能、優男、愉快犯、殺人狂ーありとあらゆるルパン三世の贋作達が水泡の如く現れては消え、或いは別の存在に変質していく。

だがその短い旅は瞬く間に終幕を迎える。

“赤”と“緑”のルパン——銭形幸一の目を以てして本物に違いないと言わしめた二人が、最後の偽物か本物となるはずの二人が、同時に現れたのだから。

◇

ルパン三世

本名不詳 生年月日不詳

国籍不明——日本の可能性強し

年齢不詳——推定26歳（xx年当時）

性別不詳——推定男性

推定IQ200以上

かの怪盗アルセーヌ・ルパンの孫とされる世紀の大泥棒。

彼が現れてから早45年、彼に関する記録は増えれば増える程真偽というものが曖昧になってしまう。

だが、それでも彼に関して分かることが一つある。彼が何故怪盗を続けるかだ。貴方ならどう考えるだろうか？

極論すれば、彼は獲物が何であつても——それこそ、何の変哲もない路頭の石であつても彼は盗みに参上してしまうのだ。

金でも名誉でも女でもない。

真に欲するは快樂にも等しい「スリル」のみ。人生は暇潰しと宣う彼らしい理由だ。其処に難攻不落の警備があるからとでも言うつもりか、かの有名な登山家の名言よろしく彼は犯罪を続けてきたのだ。

……ここまで言っておいて申し訳ないがこの簡易的な考察も一つの小さな意見に過ぎない。

ルパン三世という男がどのような存在か、完璧に言い表すには事例が多過ぎるのだ。容姿、生い立ち、性格、手口においてまで全てがバラバラ。最早、おぼろげなイメージでしか彼の共通項は揃えられないのだ。

だが共通項が多くあっても、必ずしも全てが一致する訳ではない。

言うなればこの世が夢か現かを問う程度に哲学的で仕方がないが、ルパンたる所以は思考するのさえ馬鹿馬鹿しいものなのかもしれない。



(あれが、ルパン三世ー)

降りしきる雨の中、自身がずぶ濡れになっていくのも忘れて遠山キンジはその奇妙な光景に一人、否おそらくアリアや理子も息を呑んでいた。

脆い板の如く割られた橋の坂の頂上となったところにその男は佇んでいた。

ルパン三世。世紀の大泥棒にして、ルパン四世——峰理子の父親。

高い背に針金のような体躯。長いもみ上げと刈り上げの頭。不適な笑みを浮かべた猿に似た顔立ち。

その風貌は似て非なるものかのシャーロックと相対した際と同様の気配を放っていたと言つても過言ではなかった。今まで出会った偽物のルパン達とはワケが違う。

問題なのはその覇気を飛ばしてくる者が“二人も”存在することだった。

まるで鏡写しだ。ただ一点、一方が赤の、もう一方が緑のロングジャケットを着ていることを除けば——だとしても双子だと吹き込まれば瞬く間に信じ込んでしまう代物だ、見分けが付かない。

そして、その二人は互いを睨み合っていた。さながら西部劇によくあるカウボーイの早撃ち勝負を思い起こさせる。

尊敬か畏怖か、羨望か嘲笑か——或いは殺意か。

あの二人の視線の間に込められた感情はどんな色をしているのかは彼らには分からない。

一体これから何が始まるのか——と、身構えていたその時だった。ピシヤピシヤと水気を孕んだ足音が聞こえてきたのだ。

「ー！たくつ、あの野郎いきなり橋を動かすとか何を考えていやがる？ 軽く死ぬかと思つたぜ」

「だがあれは彼奴らの問答だ。我らが横槍を入れるべきではなからうよ」

「誰が最もルパンたるか、か。さつきも言つた通り、一緒にいて一番楽しめる奴でいいだろうによ」

「ー！え？」

その声が聞こえた途端、憂いに満ちていた理子の表情が希望の光を見出したが如く一変した。

ぼつりと、理子は呟いた。

「次元の、おじさん？」

「あ？ 誰だ、名前なんざ知られてておかしくはないがおじさん呼ばわりされる程俺は親しくなんぞー！って」

「次元おじさんに、ごえつち……!!」

「……その呼び方は早急に訂正を求めたいでござる」

「誰？ 理子、アンタは知って……い、るー」

「ー！おい、マジかよ」

その光景にキンジとアリアは驚愕した。するしかなかった。

「次元おじさん、(ええ)え……」

「まさか……お前、理子か?!!」

「だから、拙者の名をよく分からぬ代物にするなとー」

生きる伝説が目の前にいる。

あのルパン三世の唯一無二の相棒にして凄腕の早撃ちガンマン、次元大介。

石川五右衛門の末裔、斬鉄劍の担い手。十三代目石川五エ門。

キンジ達の目の前にはかのルパンと世界を駆けた相棒達がいたのだ。

そしてどうやら彼らと理子は周知の仲らしい。……相手は疫病神を見る顔をしているが。

「ねえおじさんーお父様ーどっちか分からないけどお父様は一体何をしているの、と
いうか死んでいたはず十年もの間に何をしていたの?!!」

十年も前に彼女を残し妻と共に死んだはずの父親。最早天国か地獄でしか出会うこ
とができないと考えさせられた父親。

眼と鼻の先ーにはまだ早いとその手に触れることは叶うだろう。

是が非でも真実に迫りたい彼女には己が感情を抑えるのは今現在至難の業となつて
いた。

少しでも情報が欲しい、そんな言葉すら顔に書かれているのが幻視出来そうな程に焦

る理子に彼、次元大介は——

「悪い、話し合いの場所は設けるようあいつには口酸っぱく言つといてやるから今はここから離れとけ」

躊躇うことなく黙秘を選んだ。

「そんな、どうしつ……」

反論しようとする理子を金属音が遮ったかと思えば、理子の眼前には次元の愛銃であるリボルバー拳銃S&WのM19カスタムの銃口がそこに元からあったかのように添えられていた。

「——悪いこたあ言わねえ、理子。そこのお友達連れてとつとと逃げな」

ようやく口を開いた次元から出てきた言葉は警告だった。

「——だよ」

「……」

「何でだよ、何でだつ、何でお父様に会うことが駄目なんだ次元!!」

その対応に口汚く理子は叫んだ。

裏理子だ。彼女のもう一つの人格で、それを知っている人物は数える程度にしかない。
い。

しかし、今回ばかりはそれを知っていたキンジ達も困惑してしまった。

今までになくヒートアップしていることもあるが、その目に涙を貯めて遂に決壊に至ったと同時に吐かれる暴言も次第に弱々しくなっていることが更に彼らを困惑させていたのだ。

「なんつで、なんでだよ、なんでなんだよお…」

何時もは裏はあるものの、能天気ですこぶる明るい彼女も今では最早ただの少女としか言いようがない程にしおれていた。

「う、ううっ…ああ」

そんな彼女を前にして次元は重たく口を開き、言った。

「今いくとな、マジで危ねえんだ。理子」

次元がそう告げた次の瞬間、空を裂く音が恐ろしい速度で響いてきた。

ふと天を仰ぎ見れば、ソレは——

「み、ミサイル！！」

巨大な鉄の塊が後部から火を吹いて迫っていた。

彼らがそれに気付いたのも束の間、緑のルパンがいる地点から派手な爆発音が爆風と共に広がった。

一方——

(やれやれ、隠していたとはいえ遂にバレちゃったなあ…)

赤のルパンは「緑」の動向を警戒しながら後ろの喧騒に耳を傾けていた。いや、正確には聞いてはいない。ただ容易に想像出来るだけだ、この後どうやって愛娘の気分を直してあげるかの考えなければならぬという悩み事がおまけについてくるだけで。

(ーま、後回しだな。今は)

思考を変えて再度鏡写しの「緑」を見据えた。

(こいつかルパン足り得るか否かを知る方が先だ)

赤のルパンはただ相手の動向を雨音の中、静かに予測していた。

ーミサイルによる爆発が巻き起こるまで。

鉄の棺の蓋が開く

くあらずじく

理子の願い出により吸血鬼ヴラドの別荘「紅鳴館」から彼女のものだった十字架を盗むこととなったキンジ達。

しかし、いざ取り戻してみれば理子は裏切りを起こし、キンジとアリアに襲い掛かるうとする。が、理子は紅鳴館の現管理人にして武偵高校の教師でもある小夜鳴徹に不意打ちを喰らい、十字架を奪われてしまう。

実は小夜鳴は吸血鬼ヴラドの別人格だったのである。小夜鳴ーいやヴラドは本性を露わにしてキンジ達に襲い掛かった。

苦戦を強いられるも、H S Sを発作したキンジと理子の騙し打ちにより遂に吸血鬼ヴラドを瀕死に追い詰めた。

しかし喜ぶのも束の間、一人分の拍手が鳴り響く。

振り返れば彼の前に、血の様に赤い外套を羽織った男が佇んでいたー。

◇

ソレは静かに佇んでいた。

「噫——」

一体何時から其処に彼は何故居るのだろうか？

「やはり、人間は素晴らしい。化け物を殺すのはいつだって人間なのだから」

まるで始めから其処に居て、最初から全てを見ていたかのように、満身創痍に等しいキンジ達の目の前に赤い外套を纏った長身の男が現れた。

「つ、まさか増援?!」

しかし、おどろおどろしい気配はあれども闘志と感じられるものは何一つとしてないのだ。寧ろ、彼から贈られたのは畏敬の念からくる讃頌の拍手、それはまるで劇に感激している観客に他ならなかった。

「ば、馬鹿な……」

キンジ達が困惑しつつも警戒していると、衰弱した上に鉄柱の下敷きとなつて微動だに出来ないブラドは怯えた表情で震えるように口を開いた。

「貴様は、貴様は死んだはずだろう?! ヴラド杭刺し公(ヴラド・ツエペシュ)！ 何故生きている☒」

その言葉にキンジ達は一瞬思考が止まった。

一体何を言っているのだ、奴「も」ヴラド?では、ヴラドが二人もいるのか。——有り得ない。

「フン……それは嘗ての私の名だ、吸血鬼」

突如、空気が凍り付く感覚に陥った。どうやらヴラドが口にした事柄が彼の至福の時に水をさしてしまつたらしい。彼がヴラドに向けるその眼差しは実につまらないものを見てしまつたと言いたげだった。

「私が英国で消えかけ、三十年もの間 “毒血” の処理に追われたのをいいことに私の威光を使つて優雅に過ごしてたらしいな、それ相応の力があると自負してだろうー」

だが、とそのまま溜息を吐くのではないかと思わせる落胆を彼は見せながら続けた。

「長く生きた割には随分あつさり倒されているではないか、期待外れもいいところだ。ナチスの残党共の方が余程力があつたぞ？」

「英国、吸血鬼、ナチス……」

先程から彼らの会話を静聴していたアリアの様子がおかしい。

呪文でも唱えるかの如く俯いて単語を繰り返していた。しかも繰り返す度に顔が陰しいものになつていくのだ。

そして結論に至つたらしく、直様顔を上げた。

「ーまさか貴方 “Alucard” ！？」

「Alucard…… “Dracula” の逆綴りのか、ということとは彼も吸血鬼なのかいアリア？」

その言葉が聞こえたのか、外套の男は本来の仕事を忘れてたと言わんばかりだった。「失敬、同類がどうにも情けなかったもので腸が煮えくり返ってしまい忘れて挨拶さえ怠ってしまいました済まない」

「貴方が、あの機関のー」

「その通りだお嬢さん、君の推測は正しい」

外套の男は帽子をとり、英国紳士らしい立ち振る舞いをして言葉を続けた。

「私は嘗てヴラド串刺し公と呼ばれたモノ、"アーカード"だ。以後お見知り置きを」